

蔵王連峰・地蔵山

日本山岳会 山形支部 木村 喜代志

山に親しみ始めた高校の頃より蔵王は「蔵王連峰」、地蔵は「地蔵山」と理解してきた。ところが、近年「地蔵岳」の呼称を時折目にするようになり気になっていた。新聞に掲載された2023年度の高校入試問題に「地蔵岳」と記された地形図があり、国土地理院1/2.5万蔵王山から作成とあった。

改めて手元にある1/2.5万地形図（平成13（2001）/6/13発行）を開いたら「地蔵山」と記されており、「コンサイス日本山名辞典」徳久球雄・三省堂編修所編（三省堂発行昭和54（1979）/3 修訂版発行）、角川日本地名大辞典6 山形県「角川日本地名大辞典」編纂委員会（昭和56年（1981）12月8日発行）、「蔵王連峰」山形県総合学術調査会編集兼発行（昭和60年（1985）2月19日発行）、「新日本山岳誌」日本山岳会編著（ナカニシヤ出版2005/11/15発行）などは「地蔵山」である。さらに地蔵山頂の道標も「地蔵山」（2023現在）である。

いつから、どのような経緯で「地蔵山」が「地蔵岳」に変更になったのかを国土地理院に問い合わせたところ、「2万5千分1地形図に掲載している山名などの自然地名は、地方公共団体（山形市と上山市）から地元での呼称を申請いただき、この申請に基づき、平成25（2013）年発行の2万5千分1地形図から「地蔵岳」へ変更しております」の回答を得た。（2023/3/10&5/15）

蔵王の火山活動が活発になった2015年（平成27）頃に、山形県では耳慣れない「蔵王山（ざん）」の言葉が連日マスコミを通して報道された。火山活動が収まった後まで尾を引き、山形市議会でも取り上げられ、宮城山形六市町による蔵王サミットを開催し、「蔵王山（さん）」と「蔵王山（ざん）」の併記を確認し、国土地理院に地名訂正申請を行い、2018年にこれまでの「ざん」に加えて「さん」を併記することになった経緯がある。

ところが、この度の「山」から「岳」への変更は、県民や市民の間で話題になった記憶が全くない。仲間に尋ねても同じである。何かよほど急ぎの事情でもあったのだろうか。いつの間にかの申請による変更に見える。山名は、古人が想いをこめて名付けた民俗学、歴史学的な固有名詞である。思いつきや単純な理由で変更して良いものではない。

「〇〇山」と「××岳」の呼称は、意味が似通っており、正式な定義はないようで、その土地、場所によって古くからの名称を使用している場合が多い。強いて区別するなら、「山」は△型の総称で、「岳」はごつごつした高い山、山より険しい地形や山が連なっている所の山頂の一つと言えそうだ。

地蔵山と三宝荒神山の鞍部に蔵王ロープウェイ地蔵山頂駅がある。この近くに江戸時代中期、1775年建立の蔵王地蔵尊が鎮座している。地蔵尊の左手、三宝荒神山登り口に、蔵王地蔵尊保存会 昭和42(1967)/6 設置の「蔵王地蔵尊」の説明文がある。これによると、祈願すれば不慮の災難から逃れられることから「災難除け地蔵」と呼ばれていたが、後に右手の円い山まで地蔵岳と呼ばれるようになったと記されている。また、ロープウェイ山頂駅と蔵王地蔵尊の間に環境省、山形

県、東北森林管理局による「蔵王国定公園案内図」が建っている。これによると「地蔵山」と記載されており、英語表示では Mt.Jizou とあり、熊野岳や刈田岳は Kumano Peak、Katta Peak で、「山」と「岳」を区別している。なお、昨年、山形で第6回「山の日」全国大会やまがた 2022 が開催されたが、パンフレット等は「地蔵岳」と表記されていた。県のみどり自然課によると新しい 1/2.5 万地形図の「地蔵岳」に準じたとのことであった。

蔵王連峰は複式火山で、今日でも水蒸気を中心に硫化水素や二酸化硫黄を噴出している活火山である。火山活動時期や地質構造などによっていくつかのブロックに分けられ、熊野岳や刈田岳と共に地蔵山も同じブロックに入る。熊野岳や刈田岳はお釜火山活動で形成された山で、馬の背で連なっていることから「岳」の名称が相応しいが、地蔵山は独自の溶岩円頂丘とされている。従って、地質学的にも「岳」ではなく、「山」と呼ぶ方が相応しいと思える。

蔵王の大きな観光資源の一つであるも樹氷が最も発達するのが地蔵山西斜面であり、樹氷が形成されるオオシラビソの立ち枯れと再生問題、更には温暖化による樹氷帯の変動なども加わり、今後話題になることが多くなると思われる。これまで通り書籍などでの多数派の地蔵山で通すのか、1/2.5 万地形図の地蔵岳に統一されていくのだろうか。更には過去の印刷物の「地蔵山」の取扱いはどうなるのだろうか。固有名詞の変更だけに今後も尾を引きそうである。 (5/2023)